

糸島地方出土の弥生時代ガラス集成

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

糸島地方は、弥生時代から古墳時代にかけて、大陸からの先進文化の窓口として繁栄を極めた地域である。とりわけ弥生時代には稲作をはじめとする生活様式や、青銅器や鉄器など幾多の舶載文物が当該地方を経由して国内各地にもたらされたことはよく知られるところである。

多様な舶載品群の一つにガラスがある。弥生時代中期後半から古墳時代にかけて、多くのガラス製品が糸島地方にもたらされ、一部は三雲南小路、平原などの王墓をはじめとする有力者層の墓に副葬され、生前の威信を示す宝器の一つとして現代に伝えられた。

これらガラス製品の数はずでに15,000点を超え、その量は弥生時代におけるガラス分布の中心である北部九州の中でも随一といえる。

市内の遺跡からは墳墓・住居・祭祀遺構など多様な遺跡、遺構からガラス製品が出土しており、その出土傾向について把握することは、今後の弥生時代遺跡の調査において有益であろうと考えられる。

現在、市内遺跡などから出土した資料は、原則として報告書作成が完了したものから順次伊都国博物館に移管収蔵されることとなるが、何らかの要因で報告から漏れたものや資料保全のために未報告のまま移管されたものも存在する。市では平成22～24年度に伊都国歴史博物館、志摩歴史資料館が収蔵する資料の台帳作成に取り組み、その管理下にある文化財の把握に努めてきた。これによって、両館が保管する主要資料の抽出・把握が容易に行えるようになった。

このシステムを活用するとともに長垂山以西の福岡市西区域を含めた旧糸島郡域の既報告資料も加えて古代の伊都国域と想定した地内におけるガラス資料を集成した。弥生時代のガラス研究に活用いただければ幸いである。

なお、今回の資料集成は弥生時代の遺構出土品に絞って行ったが、各遺構の性格上、その時期を

弥生時代に限定することができなかったものもあり、一部に古墳時代に下るものも含まれている可能性があることをおことわりしておく。

2. 糸島におけるガラス調査の足跡

糸島地方におけるガラス調査研究史について簡単に触れておく。

当該地方においてガラスの出土が初めて記録されたのは福岡藩の学者青柳種信である。文政5（1822）年に伊都国王墓のひとつ三雲南小路遺跡が発見された際に、甕棺（1号甕棺）から出土したガラス璧、勾玉、管玉などについて詳細に記されている（註①）。ガラス璧について「中心は飴色にして澤あり、硝子の如し、若は此物硝（硝）子の水土にむされて白色に變したるか」とガラスが変質したものと推定している。

なお、同じく変質していたガラス玉類については「いずれも練物にして飽なり」と記した。劣化し白墨化した姿からはその素材を想定できなかったことは無理からぬところである。

この1号甕棺は、昭和49年～50年にかけて福岡県教育委員会が発掘調査を行い、「練物」玉類の正体が風化した鉛バリウムガラス製の玉類やガラス璧であることが確認され、ガラス璧は8枚以上副葬されていたことも判明した。さらに2号甕棺からもガラス勾玉、管玉、ガラス璧を加工した垂飾などが出土した（註②）。

昭和25年には、戦時中に東二塚遺跡の甕棺墓から発見されたガラス製品について原田大六が報告している。民家宅地で発見された弥生時代終末期の合口甕棺（成人棺）内から多量の水銀朱、人骨とともにガラス釧、管玉、小玉が出土し、釧については国内産との見解を示した（註③）。同資料について、梅原末治は古墳出土の石製釧との類似性を指摘している（註④）。その後、藤田等はこのガラス釧が楽浪系銅釧の系譜をひく可能性を指摘しながら中国製素材を用いて奴国で製作されたと推定した（註⑤）が、小寺智津子は製品として大陸

から船載されたとの見方を示した(註⑥)。現在は甕棺とともに東京国立博物館に収められている。

昭和40年に発見された平原遺跡では、多数のガラス製品が出土し、国内唯一の出土である耳環2点や、ガラス連玉の出土が報告された。その後、平成7年度～16年度に行なわれた保存修復事業にあたった独立行政法人奈良文化財研究所では、肥塚隆康によるガラス素材の分析調査が行われ、琥珀蛋白石(オパール)とされていた玉類がカリガラスであることや、連玉が2種の性質の異なるガラスを内外面2層に重ねた特殊な構造をもつことなど新たな成果が報告された(註⑦)。

平成10年以後、出土したガラス製品は福岡市埋蔵文化財センターに分析をお願いした。三坂七尾遺跡では、中世と推定していた土壙墓のガラス小玉を分析した結果、弥生後期のものであることが判明し(註⑧)、平成16年に実施した井原ヤリミゾ遺跡の弥生後期の墓群からは色、材質、形状など多様なガラス玉の副葬が明らかとなるなど貴重な成果が報告された(註⑨)。

弥生時代のガラスについての研究対象として取り扱われることも多く、藤田等は中～後期の研究資料として糸島地方のガラスを多く考察対象とし(註⑩)、柳田康雄はガラス玉の製作技術の検証の視点から考察を重ね(註⑪)、小寺智津子(註⑫)、谷澤亜里はガラスの流通からみた北部九州社会の考察を展開している(註⑬)。

2. 糸島地方におけるガラスの初出

ところで、わが国最古のガラス出土例は弥生前期末の吉武高木遺跡117号甕棺墓に副葬されたソーダ石灰ガラス製の小玉とされ、この時期には装身具として大陸より持ち込まれたものと考えられている。続いて中期初頭には佐賀県東山田一本杉遺跡、さらには吉野ヶ里遺跡など佐賀平野東部、唐津平野の宇木汲田遺跡などから出土しており、ガラス装身具が首長層の副葬品としての地位を確立したものとみられる。

しかし、これまでのところ糸島地方では弥生時代前半期の遺跡、遺構からガラス製品は出土していない。当該期の遺跡や遺構の調査数の少なさも要因の一つかもしれないが、当該期の大規模な集落や首長墓が確認されていないことがその背景にある。早良平野、佐賀平野東部、唐津平野では青

銅製武器、玉、さらに多鈕細文鏡など豊富な副葬品を収めた有力首長墓が出現しており、現在までに把握されている糸島地方の様相とは大きく異なる。

当該地方でガラス製品の出土が確認できるのは、上記地域において、有力層墓の集中傾向が希薄となり、大首長(王)を中心としたクニ＝伊都国が成立した弥生中期末頃になる。三雲南小路王墓の1、2号甕棺墓である。この時期は西北九州沿岸地域における勢力図の大きな変革期にあたると考えられ、ガラス製品はその威信を表象する威信財のひとつとして伊都国、奴国の大首長墓に副葬されたものと考えられる。

3. ガラス製品の種類とその材質

①種類

糸島地方から出土している主なガラス製品としては以下のものが確認されている。

璧 三雲南小路1号墓から出土した8枚(第1図1、図版1-1)と、2号甕棺から出土した垂飾に転用された片材1点(第1図3、図版1-4)がある。

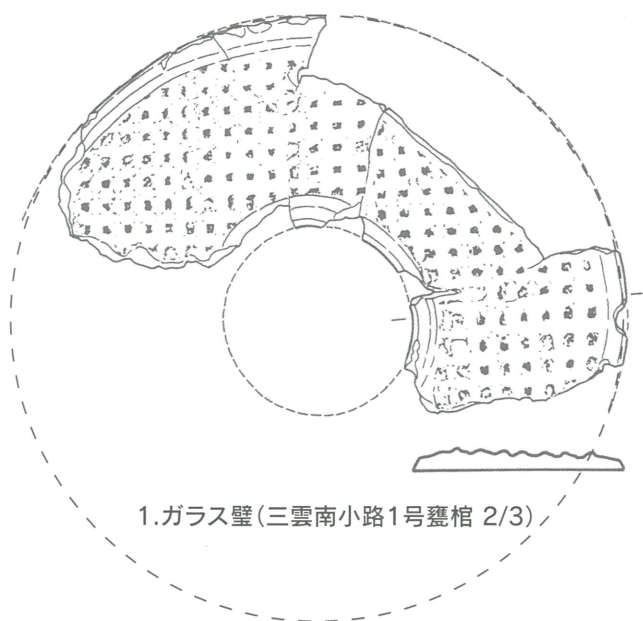
国内におけるガラス璧の出土遺跡は他に須玖岡本遺跡D地点甕棺、東小田峯遺跡の10号甕棺の円形装飾品1点、安徳台遺跡2号甕棺の勾玉転用片3点などがあるが、いずれも北部九州に限定され、完形品での副葬は三雲南小路1号甕棺と須玖岡本に限られる。

勾玉 三雲南小路1号甕棺(第1図2)、2号甕棺(第1図4)、平原1号墓出土品(第1図7)である。平原1号墓出土の3点の勾玉は丁字頭を有する優品である。

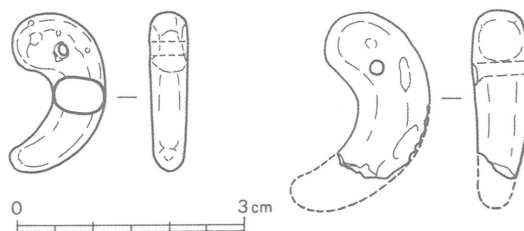
管玉 墓からの出土品は三雲南小路1、2号甕棺、井原ヤリミゾ13号甕棺墓、平原1号墓(第1図8)、東二塚甕棺墓に限られるが、他に深江井牟田遺跡、上鐘子遺跡、一の町遺跡、今宿大塚・五郎江遺跡、元岡遺跡などからも出土している。いずれも土器溜りなどからの出土で祭祀にともなう供献、遺棄行為による可能性がある。

釦 東二塚遺跡から出土した釦(第1図9)のみである。22片が残存しており、径の復元により、直径8cm、6.5cmの2個分と考えられている。

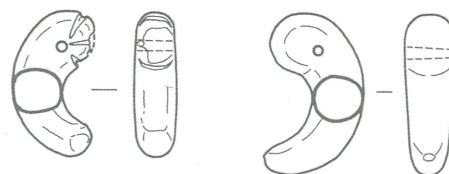
柳田康雄は、資料観察の所見から少なくとも4個分の資料が存在した可能性を指摘しており、公



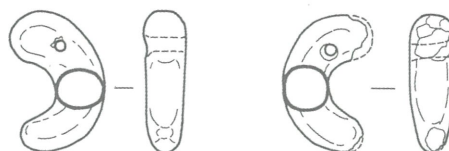
1. ガラス壁(三雲南小路1号甕棺 2/3)



2. ガラス勾玉(三雲南小路1号甕棺)



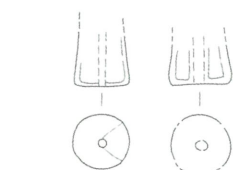
4. ガラス勾玉(三雲南小路2号甕棺)



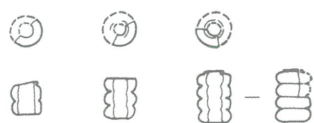
10. ガラス聚玉

(三雲サキゾノ遺跡 1/1)

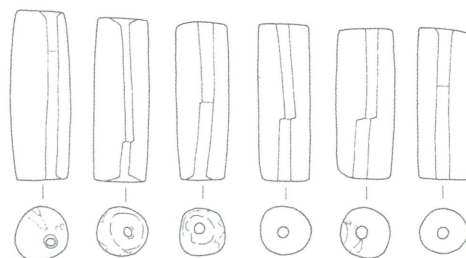
3. ガラス垂飾(三雲南小路2号甕棺)



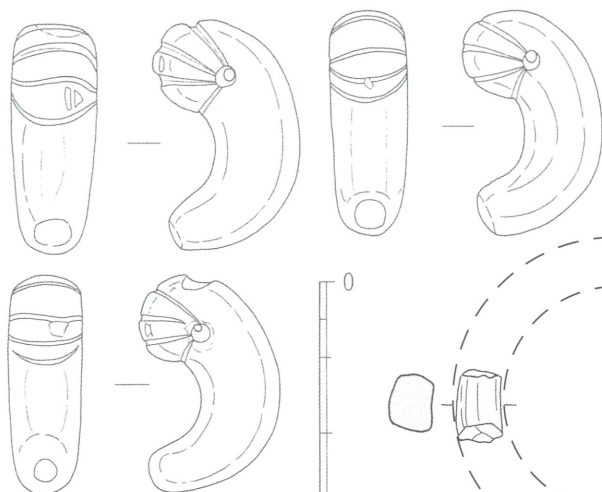
5. ガラス耳瑠(平原1号墓 1/1)



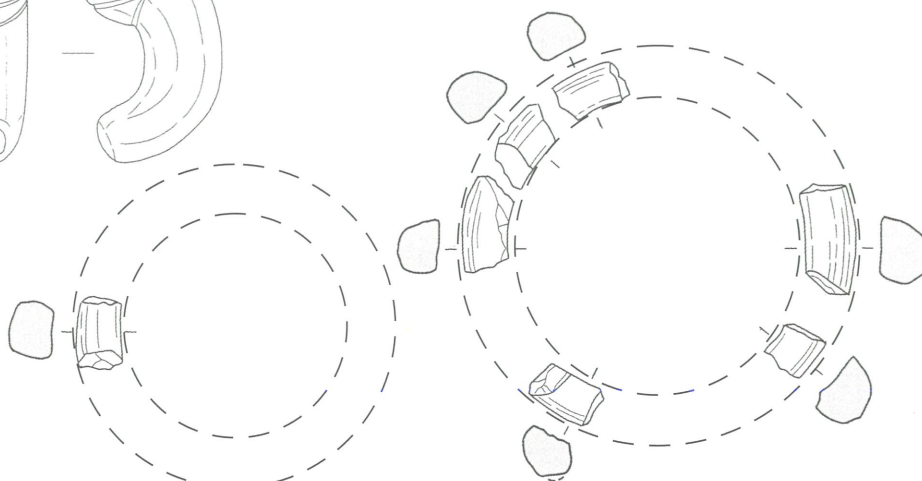
6. ガラス連玉(平原1号墓 1/1)



8. ガラス管玉(平原1号墓 1/1)



7. ガラス勾玉(平原1号墓)



9. ガラス釧(東二塚甕棺墓 2/3 藤田等1994実測図をもとに作成)

第1図 糸島地方から出土した主な弥生時代ガラス

表された実測図断面（第1図9）の形態観察から
もこの指摘に賛同できる

弥生時代のガラス釦は、他に西谷2号墓（島根県）、比丘尼屋敷墳墓、大風呂南1号墳（以上京都府）の4遺跡からの出土が確認されており、大風呂南例以外は鉛ガラスを素材とする共通点が見られるという（註⑭）。

素玉 三雲サキゾノⅠ-7地点4号住居から出土した鉛ガラス製の1点（第1図10）が知られる。同種の玉は楽浪郡を中心に分布し、国内での出土は極めて少ないとされる（註⑮）。

耳環 平原1号墓から2個体分（第1図5、図版2-4）が出土しており、国内で唯一の出土である。管玉状の管ガラスの中央が鼓状にくびれる。後漢末の舶載品とされる（註⑮に同じ）。

連玉 井原ヤリミゾ13号木棺墓（図版2-1）、平原1号墓（第1図6、図版2-5）から出土した2例がある。平原1号墓出土の連玉はソーダ石灰ガラス製で気泡を多く含んだガラスに透明度の高いガラスが外から覆う2層構造をとる特殊な玉である（註⑯）。

井原ヤリミゾ例については、類例として楽浪土城出土例にあるが、柳田康雄は小玉が癒着したものであるとして再考を求めている（註⑰）。

小玉 丸玉、小玉、微小小玉、特小小玉など報告書によって呼称が異なるが、本集成では球状を呈する玉は一括して小玉として紹介する。数量的には出土したガラスの大半がこの製品である。素材としてはカリガラス占める割合がきわめて極めて高いが、稀にソーダ石灰ガラス製のものもある。東二塚甕棺墓出土の小玉は唯一鉛ガラス製の太粒の玉である。

色調は、淡青、青紺、青緑、紫青、赤、黄等多様で透明性が高いものから低いもの、不透明のものもありこれらはガラス素材と密接に関連するとされる。

②材質

弥生時代にわが国で出土するガラスの材質は鉛珪酸塩ガラスとアルカリ珪酸塩ガラスに分けられ、それぞれが鉛ガラスと鉛バリウムガラス、ソーダ石灰ガラスとカリガラスに細分されるという（註⑱）。

糸島地方における各種ガラスの主要な材質とその特徴は以下のとおりである。

鉛バリウムガラス 三雲南小路1号甕棺出土の璧、勾玉、管玉などにみられる。表面は経年変化で風化し乳白色を呈するが、内側には当時の色調である半透明緑色を残すものもある。三雲南小路2号甕棺出土の垂飾は当初の色調を良くとどめている。糸島地方でガラス製品が登場する弥生中期末の特徴的なガラス素材といえる。

鉛ガラス 東二塚甕棺墓出土のガラス製品（釦、管玉、丸玉）、井原ヤリミゾ13号木棺墓出土の連玉、三雲番上遺跡の住居群から出土した管玉、丸玉、算盤玉、仲田17号住居、平原1号墓中央土壙内出土小玉の一部が鉛ガラス製である。

バリウムを含まない鉛ガラスの製品は極めて少なく、糸島地方では拠点集落の三雲・井原遺跡と当該地方の有力首長墓に集中する傾向がみえるのが特徴といえ、その流通ルートが限定的であったことがうかがえる。

ソーダ石灰ガラス 上罐子遺跡出土の管玉、井原ヤリミゾ15号木棺墓、今宿五郎江遺跡出土の小玉など後期前半と平原1号墓のみにみられるが、出土数はわずかである。

カリガラス 小玉の素材として弥生後期前半に出土量が急増し、古墳時代まで継続して出土する。

北部九州の墳墓資料では弥生後期前半～中頃に一つの墓から大量に出土することが多く、井原ヤリミゾ遺跡の墓群からだけで計12,000個以上が出土している。また、集落内から出土する小玉のほとんどがカリガラス製である。

ファイアンス 石英の粒子を焼結して作られたもので、ガラス誕生の前段技術で地中海から西アジア地域がその生産地とされる。わが国では、三雲仲田遺跡において1点出土しているのみである。

4. ガラス製品出土遺構と出土分布の傾向

①出土数

一覧に掲載したとおり糸島地方出土の弥生時代のガラス製品は総数15,471点に及ぶ。谷澤亜里が弥生時代後期の北部九州におけるガラス小玉の地域毎の分布傾向をまとめた結果を参照すれば、弥生時代ガラスの一大消費地であることは明らかである（註⑲）。

②出土遺構

糸島地方では、ガラス製品は甕棺墓、木棺墓、土壙墓などの墳墓遺構を中心に、祭祀に関連する



第2図 ガラスの出土遺跡分布 (●5個未満 ●5個～10個 ●11個～20個 ●21個～50個 ●51個以上
□はガラス副葬墓)

とみられる土壌、溝、住居や柱穴など、多様な遺構から出土しているが、なかでも出土数が多いのは墳墓で、出土資料の97.6%、14,800点以上を占める。ガラス製品を副葬していた墳墓の数は38基で、弥生中期末の三雲南小路1、2号甕棺にはじまり平原1号墓にいたるまで、弥生時代後期全般を通して副葬が確認されている。

なかでも三雲・井原遺跡での集中度は高く、総数12,000点を超えるガラス小玉が出土した井原ヤリミヅ遺跡の墳墓群が目をひく。三雲南小路遺跡1、2号甕棺（中期末）や平原1号墓（終末）では、出土した玉の量も多いが、これとともに璧（三雲南小路）や勾玉（三雲南小路、平原）、連玉、耳瑠（平原）などの特殊品が含まれており、希少性の高い宝器と言えるガラスが副葬されていることも特徴である。

なお、伊都国歴代王墓の一つとされる井原鍵溝遺跡について、記録の上ではガラス玉などの出土

は確認できないが、報告者の青柳種信の聞き取り調査が、出土してから40年が経過していたこと、脆弱、微細なガラス玉が出土していても、関係者の記憶から漏れて種信に伝えられなかった可能性もある。井原ヤリミヅ遺跡の弥生後期の墓群から多量のガラス玉が出土したこと、同時期の唐津市桜馬場遺跡からもガラス玉が大量に出土していることを勘案すれば、井原鍵溝遺跡にもガラス玉が副葬されていた可能性は高い。

③出土遺跡の分布

出土遺跡数は三雲・井原遺跡を単一遺跡として捉えると15遺跡となる。

当該地方においてガラス製品が出土した遺跡の分布とその量的関係を示したのが第2図である。各遺跡における出土量の差は、遺跡の残存度合や調査の面積によっても考慮されるべきであるが、集落の広範囲を調査した東遺跡群や飯原門口遺跡では出土数はわずか1、2点にとどまっているこ

とを考えれば、集落内で多数のガラス玉が出土した集落の優位性を認めることは可能であろう。

この分布においても、三雲・井原遺跡での出土数が他に比べて多く、他集落に対する優位性がみられる。また、今宿五郎江遺跡、一の町遺跡や上鐘子遺跡など糸島地方における有力集落ではガラスの出土数が多いこともわかる。これら有力集落の多くは海浜部に位置し、その入手が海を介した交易によるものであることを想起させ、また、これらの集落遺跡から楽浪系・三韓系土器や中国銭貨の出土が報告されていることは、ガラスの流入経路を考えるうえで示唆的である。

5. 出土状態からみたガラスの使用方法

ガラス製品の中心となる玉類は装身具の一つであり、身体装飾に用いることを主目的としたことは疑いないが、遺跡からその使用方法を推定できる情報を得ることは少ない。墓内に装身具として遺体に着装した状態で納められていても、遺体の腐朽によって元位置から移動することが常であり、また、後世の攪乱によって散乱する場合も多い。三雲南小路王墓では2基の甕棺ともに既に攪乱を受けていたことから、副葬時の状況としてはガラス璧が銅鏡との間に挟まれた状態であったことが報告されたにとどまる。

古墳時代初頭の本田孝田遺跡では10個程のガラス小玉が径2cmほどに環状に並んだ状態で棺底から出土した。孔に糸を通し綴ったように並んでいたことから、指輪のような使用形態が想定でき、副葬状態をとどめていた数少ない例といえる(第3図1、図版3-a)。

墓におけるガラス小玉の使用方法としては注目すべき事例が近年増加している。弥生時代後期前半の三坂七尾遺跡では、54号土壇底面からガラス小玉430個が頭部とみられる径30cmほどの範囲に散乱した状態で出土した。埋葬当初から頭部付近に撒かれていた可能性が高いと考えられる(第3図2、図版3-b)。

また、井原ヤリミゾ遺跡では、多くの木棺墓や土壇墓内外から多数のガラス小玉が散乱した状態で出土したが、三坂例とは異なり、土壇内の広範囲に広がり出土レベルにもかなりの高低のばらつきが認められるものもあった。葬送儀礼として棺内にガラス小玉を撒いたり、さらに墓壇を埋め戻

す際にもガラス小玉を撒いた状況を想定できる(第3図3、図版4-b)。

さらに、平原1号墓では中央土壇の割竹形木棺から出土したガラス勾玉が、棺内でカリガラスの小玉一塊とともに出土し、現在もその状態を維持したまま保存されている。現状からは紐などで連続して綴った状態ではなく一塊に置いた状態が想定できる(第3図4、図版4-c)。勾玉とともに割竹形木棺の棺上に副葬されていたものが棺内に落下したものと考えられている(註⑩)。

このようなガラス玉の出土状態について、かつて小山田宏一は中国で醸成された玉の呪的觀念思想の影響のもと弥生後期に北部九州で発達した葬送儀礼であるとの見解を示し(註⑪)、さらに小寺智津子は墓に副葬された玉類の出土パターンについて精緻な考察を行い、いずれも呪的な祭祀行為を想定している(註⑫)。

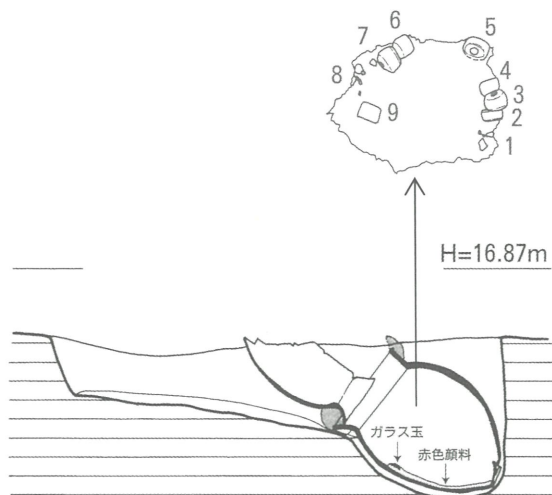
中国前漢では、死者に玉を添えて埋葬する葬玉の習俗が成立するとされる(註⑬)。頭部(顔面)に赤色顔料を塗布し避邪する習俗は弥生時代当初から知られるが、これに前漢の葬玉の思想が融合した結果、当該地方におけるガラス玉の副葬形態が生まれたものとも考えられる。ガラスの使用方法については、今後さらに詳細な調査分析が求められるだろう。

また、上鐘子遺跡では、谷地の土器溜りから土器とともに20個のガラス小玉が集中して出土している。低地の泥炭質土壌からの出土であったため、玉の検出は困難を極めた。本来はこれより多くの玉があったのかもしれない。周囲からは穿孔したり、口縁を一部打ち欠いた土器が多く出土しており、水場における祭祀が行われたものと考えられる。元岡遺跡42、52次調査でも谷地からガラス管玉がまとまって出土しており(註⑭)、祭祀に伴い意図的に遺棄された可能性がある。

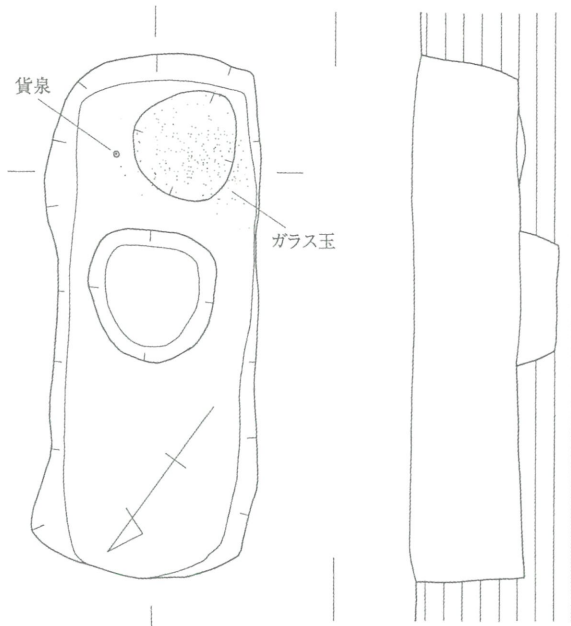
集落内で竪穴住居をはじめとして様々な遺構から出土するガラス玉の多くは、偶発的な落下などによる埋没だけでなく、意図的な遺棄、供献など祭祀的な要素も想定することも必要である。

5. 生産遺構

糸島地方では、弥生時代のガラス生産に関する遺構は確認されていない。福岡平野東南部の須玖遺跡群において、生産関連の遺構や遺物が多数確



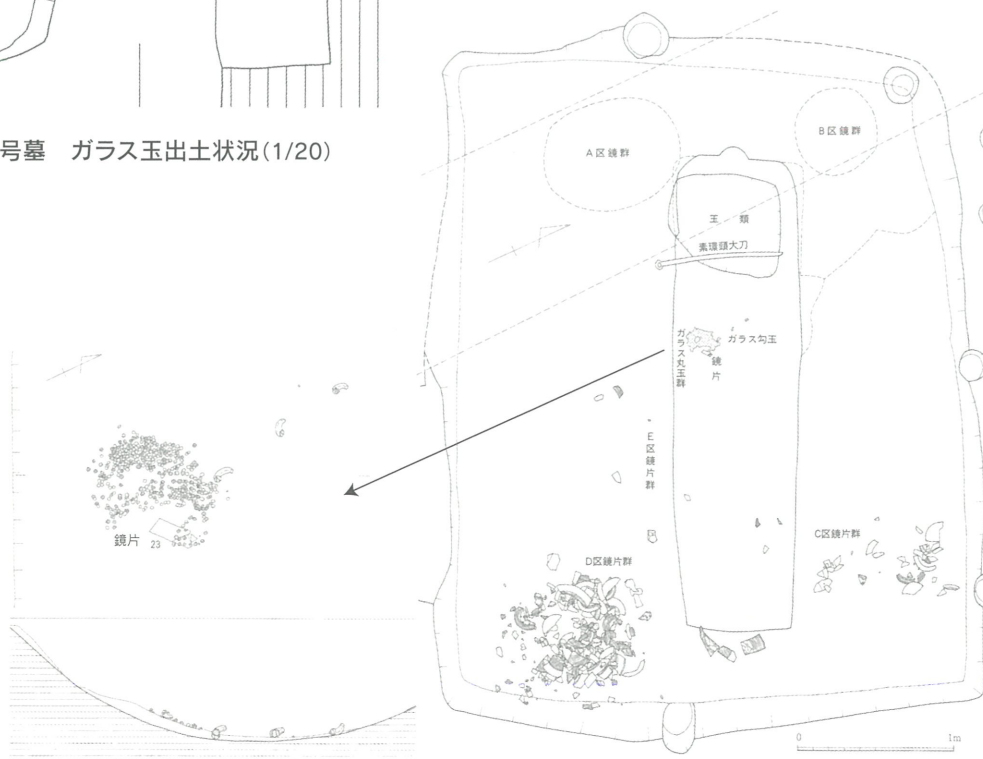
1. 本田孝田遺跡2号甕棺ガラス玉出土状況(1/20)



2. 三坂七尾54号墓 ガラス玉出土状況(1/20)



3. 井原ヤリミゾ7号木棺墓 ガラス玉出土状況(1/16)



4. 平原1号墓中央主体部 副葬品出土状況概況(右・1/50)とガラス玉出土状況(左・1/15)

第3図 ガラス玉出土状況図

認されている状況とは対照的である。

なお、今宿五郎江遺跡からガラス滓状の遺物が出土していることは注意を要する。近隣の大塚遺跡では、古墳時代初頭の鍛冶工房とみられる住居が確認されており、ガラスの生産工房が存在していた可能性もある。

6. おわりに

糸島地方から出土したガラスを集成し、当該地方のガラス出土傾向について器種、材質、出土遺構、出土遺跡の分布等について概観した。これまで、弥生社会におけるガラスの受容過程について多くの論考において検討が加えられてきたが、糸島地方の様相についても従来の研究成果を援用することにより概ね理解することができた。

糸島地方の弥生時代のガラスの出土量の多さはこれまでも指摘されてきたが、現時点でその数は15,000点を超え、今後、新たに発見されるであろう新たな王墓、有力層墓などにより、さらにその数は増加することが見込まれる。

比佐陽一郎は、糸島地方出土のガラスの留意点として特殊製品の存在を指摘する(註⑭)。墓からは三雲南小路1号甕棺の壁、井原ヤリミゾ13号甕棺墓の連玉、東二塚甕棺墓の釧、平原1号墓の耳環や連玉などが出土し、また集落からは三雲仲田遺跡のファイアンス、今宿五郎江遺跡(4次調査地点)の赤色管玉が出土するなど、いずれも国内では希少なガラス製品が出土し、これらが大陸から楽浪郡を経由して糸島地方にもたらされた可能性を示唆している。

弥生時代のガラス製品については、その大半が大陸からの舶載品であるといわれている。糸島地方では拠点集落である三雲・井原遺跡に出土が集中するとともに、中核集落である今宿大塚遺跡、一の町遺跡、元岡遺跡などからはガラス製品が多く出土しており、これらの集落から楽浪系土器や中国銭貨などが多く出土していることは、舶載ガラスの流通ルートを考える上でも重要である。

また、当該地方では威信財として墓に副葬されただけでなく、集落における祭祀などでも使用された事例が後期前葉からみられることも特徴である。玉の呪的使用が集落祭祀にも反映したものと考えられ、弥生中期末から前漢社会との深い関係を築いた糸島地方=伊都国ならではの現象ともい

える。これらガラスの出土数の多寡は、当該地方においては集落間の力関係を検証するうえで指標の一つに加えることもできる。

当該地方の個々ガラス製品についての詳細なデータは一覧表にみられるとおり未だ不揃いな状況である。今後これらの精度を高め、情報の充実化を図ることにより、当該地方の弥生時代研究の進展に努めたい。

註

①青柳種信1822『柳園古器略考』

②柳田康雄1984『三雲遺跡南小路地区編』福岡県教育委員会

③原田大六1954「日本最古のガラス」『糸高文林』2 糸島高校

④梅原末治1960「日本上古の玻璃」『史林』第43巻第1号
大賀克彦2002『小羽山古墳群』清水町教育委員会P127～145

⑤藤田等1994『弥生時代ガラスの研究』名著出版

⑥小寺智津子2010「弥生時代のガラス釧とその副葬」『東京大学考古学研究室研究紀要』24

⑦肥塚隆康2000「平原遺跡出土ガラス遺物の調査と保存処理」『平原遺跡』

肥塚隆康2004「科学が解く伊都国—平原遺跡のガラスが物語るもの」『シンポジウム邪馬台国の時代「伊都国」』

⑧比佐陽一郎 岡部裕俊2004「三坂七尾遺跡出土貨泉について」『福岡考古』21 福岡考古懇話会他

⑨後掲報告書一覧12参照

⑩前掲⑤

⑪柳田康雄2008「弥生ガラスの考古学」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室50周年記念論文集

⑫小寺智津子2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化談叢』第55号 古文化研究会

⑬谷澤亜里2011「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通—北部九州を中心に—」『九州考古学』86 九州考古学会

⑭前掲⑥

⑮前掲⑤

⑯前掲⑦

⑰前掲⑪

⑱前掲⑬

⑲肥塚隆康1995「古代珪酸塩ガラスの研究」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集文化財論集Ⅱ』

⑳後掲報告書一覧14参照

㉑小山田宏一1995「副葬品」『季刊考古学』52 雄山閣

㉒小寺智津子2006「弥生時代副葬墓にみられる呪的使用とその背景」『死生学研究』第8号

㉓町田章2002「中国古代の葬玉」『奈良文化財研究所学報』第64冊

㉔常松幹夫氏より御教示

㉕比佐陽一郎2012「伊都国とガラス」『伊都国の研究』学生社